

瀬田に特ダネなくとも

宇治敏彦

「瀬田に特ダネなし」というのが、大平さんを担当していた記者たちの一致した認識だった。口が堅いうえに、ペテラン記者も駆け出し記者も差別しない態度が、自然にそういう評判を生んだと思うが、帰り際にあの笑顔で「またこいよ」と言われると、ニュースのネタはないことがわかっていても、足が向いてしまう。

だが、二十年近いお付き合いの中で、たった一回だけ特ダネをもらったことがある。昭和三十七年の参院選の直前と記憶しているから、大平さんが池田内閣の官房長官だった頃だ。当時はまだ駒込林町に住んでおられて、官邸詰めの記者団は、大平邸への夜回りを「団子坂」と呼んでいた。

応接間で長官のお出ましを待つ間に、珍しく「オールド・バー」が出て、お手伝いさんがグラスにそそいだら中からソースが出てきて、真っ赤になって引つ込んだり、ある夜、記者の一人がテーブルの上にお酒をこぼしたら、翌日からテーブルにビニールのカバーが掛けてあったりして、今になってみると当時の大平邸の雰囲気を知る懐しい思い出である。

六月のある夜、団子坂の夜回り客は、たまたま私一人だった。晩年の大平さんは、幹事長に就任された頃からよくしゃべるようになったが、それでも寡黙の人という印象が強い。特に二人きりで差して話している時は、これほど空間を意識させる政治家も少ない。まして当時駆け出しの私には、何を切り出しても「そ」が「ほ」に近く聞える。「そうか、そうか」の繰り返して、そのあと黙ってしまう大平さんの応対は荷が重く、早くだれか相棒

の記者が来訪しないかと願ったものだ。

ところが、大学管理問題を聞いたら、珍しく大平さんの反応があった。池田首相が「人づくり」「国づくり」を熱心に言い出していた頃で、五月に大学の管理を強化する発言をして、教育界に波紋を投じていた。

「総理が大学の学長とこの問題で話し合うことは考えていないのですか」と聞くと、大平さんは「遠からずそうなるだろう」と答えた。「池田首相、近く茅東大学長らと大学管理問題で協議」という特ダネがのつたのは、その翌日である。もっとも、その後の経過があつて、首相と茅東大、平沢京大、森戸広島大など国立八大学長との会談が実現したのは、大平さんが外相に変わつてからの同年九月十九日のことだった。

政治のことでは口が重い大平さんも、経済や読書のこととなると生き生きとしゃべつた。五十年に私が『新中国への旅』という本を出版したので持参すると、ペラペラとめくつて「社会部の記者が書いた本みたいじゃないか」とひやかされた。友人が尾崎記念館で出版記念会を開いてくれた時も、大平さんの人柄をしのばせる一つのエピソードがある。受付を手伝つてくれた女性の一人が、ある自民党の実力者の熱烈なファンだった。真つ先に駆けつけてくれた大平さんに、その女性が拙著を渡すと、「ありがとう」といつて当時蔵相の大平さんが自ら受け取つてくれた。ところが、その後には彼女の信奉する実力者が姿を見せ、本を渡そうとしたら、右手の親指で背後の秘書を指さして会場にさつさと入つていったという。その日を境に彼女は、熱烈な大平支持者に転じた。

日頃、自らを厳しく律し、ストイックに生きようとしていた大平さんに、私は政治家としてより、人間としていろいろ教えられることが多かった。首相に就任された時、そうした大平さんの人間性が政治運営の上に生かされることを願つたのは、私だけではあるまい。党内抗争の明け暮れで、「大平政治」の結実を見ないうちに急逝されたのは、返す返すも残念でならない。

(東京新聞政治部長)